

作製した Curved Image が適していた。ステント留置術後では、ステント内部の評価が可能な、Curved Image が、内膜肥厚の評価、内径の測定等によるフォローアップに適していた。DSA に比して分解能の低さや拍動の影響により内径および内膜肥厚は、過小評価されるものの簡便で侵襲も少なく有効な検査法と考えられた。

## 5 頸部頸動脈病変における超音波検査の有用性 頸動脈ステント内狭窄の経験

川又 浩行

立川総合病院生理検査室

狭窄病変に対する低侵襲治療として当施設でも PTA やステント留置が施行されている。

今回我々はステント留置後の経過観察におけるエコー検査(以下 CAUS)でステント内狭窄と思われる症例を経験した。

症例は75歳男性。H13年3月軽度の失語により来院。精査にて左内頸動脈に低～等輝度の偏在性非潰瘍病変による高度狭窄(84%)と診断。PTA 目的にて5/1入院。5/9STENT留置。

術後1ヶ月のCAUSにてSTENT内部に著明な流速変化一般に狭窄直後の血流速測定にてある程度の狭窄が推定可能といわれるが、今回のように最大血流で1.35m/sと有意な値ではないものの、連続的に測定する事により著明な変化を指摘することができた。非侵襲的に繰り返し行える超音波検査は、治療戦略の検討や術後の経過観察に有用であるが、ピットホール回避の為に超音波特性を十分理解し、多くの方向から病変部を検索する事が必要不可欠である。

今後も長期経過観察し症例を蓄積したい。

## 6 発熱、蛋白尿、歩行障害を呈し、P-ANCA陽性であった pachymeningitis の1例

登木口 進・永井 雅昭\*・宮川 芳一\*\*

新保 俊光\*\*・岡本浩一郎\*\*\*

伊藤 寿介\*\*\*\*

小千谷総合病院神経内科

Dept. of Cellular & Molecular  
Medicine, UCSD \*

小千谷総合病院内科\*\*

新潟大学医学部放射線科\*\*\*

新潟大学歯学部歯科放射線科\*\*\*\*

肥厚性硬膜炎は硬膜の慢性肥厚性炎症を特徴とする希な疾患と考えられていたが、画像診断学の進歩により生前に容易に発見、診断されることが可能となった。

我々は今回、発熱、歩行障害、腎炎、中耳炎などを呈し、炎症反応とP-ANCA陽性より顕微鏡的PNと診断した74歳男性を経験した。造影MRIにより左右差のある明らかな硬膜肥厚を認めた。ステロイド投与により硬膜肥厚は消失し、早期診断早期治療の重要性を感じた。

## 7 口腔に進展し悪性化した再発中頭蓋底髄膜腫を画像経過

堅田 勉・佐々木善彦・原田美樹子

外山三智雄・羽山 和秀・土持 眞

日本歯科大学新潟歯学部歯科放射線学講座

左側頰部から側頭部の範囲に認められた髄膜腫をMR画像で経過観察を行った。初診時に腫瘍は境界明瞭で内部やや不均一なGd-DTPA造影性を示す長径90mmとして認めた。骨シンチでは第2相のblood pool imageで病変相当部への集積を認めたが、static画像では異常所見はなく、腫瘍シンチでは病変相当部に鼻腔と同程度のGaの集積を認めた。以上の所見より左側側頭窩下に発生した非上皮系悪性腫瘍を疑ったが、生検の結果でmeningiomaの回答を得た。計4回行われた手術における全摘出はいずれの時期も困難で、再発と検査・切除を繰り返していました。4回目の手術での摘出標本で、初診時とは明らかに異なる異形成細胞を認めたため臨床的に悪性髄膜腫と診断し